

猫ときどき狸

ところによりクマ



nobvko
《水野暢子》

メルとメル、そして名無し

今飼っているウェンディは3匹目の猫です。

1匹目はまだ長男が生まれる前。

どしゃぶりの雨の朝、いつものように出勤しようとして外に出たところ、ドアの所でミィミィ鳴いていた小さな黒い仔猫でした。

猫を飼うつもりなんてなかったので、本当に弱りました。

捨て猫を2匹飼っている同僚（イギリス人）に相談したり、タップ（←犬）に頼んだりして（笑）、なんとかしましたが、それから1年ほど後、長男が生まれる少し前の月夜に遠出したらしく、車に轢かれて冷たくなっているのを近所の方が知らせてくれました。

2番目のメルは、タップのエサに惹かれて居着いちゃった猫で、生まれて半年（？）くらいたっている様子でした。

そしてこの仔がいた3年間、我が家を悩ましたのが猫にまつわるエトセトラでした。

もともと猫も犬も飼いたいわけではないワタシ（アレルギーあり）にとって、湿気の多い日本の家屋内での飼育はとてもじゃないけど無理な話（にその時は思われました）。

それで前回同様、外飼いしていたのですが、今まで普通におつき合いしていたご近所が「お宅の猫がウチの庭で悪さをするのよ～」と不快感もあらわに文句を言うようになってしま
って・・・★

せめて匂いを軽減する成分入りのエサにしてみたり、庭に猫のトイレを数カ所用意したりするのがせきの山。

ご近所のなにげない文句を聞く度に、心底謝っては、飼うことになったいきさつを話したり、自分もこれ以上猫が増えてしまうことには反対なので、メルには去勢手術を済ませたことなども伝え、我が家の一員であることがわかるようにと首に鈴と一緒に緑の魚形の名札をつけたりしました。

それでも相変わらず、片身の狭い思いをしました。

町の広報誌で「猫を飼うならできるだけ家の中で」と載っているのを目にした時には「そ、そんな～★」と悲観的に・・・。

とそんな状況の中、あれは5月の半ばだったでしょうか、生まれてしばらくたっているらしい仔猫が迷い込んできた時には心底まいりました。

こ、これ以上はご近所様が許してくれない～。

かといって、保健所につれていくことなんてできない～！

一週間ぐらい追い払い続けたのにミイミイと鳴き続けるお腹のすききったその仔猫を、悩んだ末、悪いと知りつつも生き延びられそうな場所へ車で運んで、一回分のエサと一緒に置いてきました。

かわいい仔猫なので、ここらと違って空間の広い農家の庭先なら、どこかに置いてもらえるのではないかとの淡い期待もあって。

ところがそれから10日ほどたって、どこかで聞いたような鳴き声に耳を疑い庭に出ると、まぎれもなくあの仔猫が元気な姿で戻っていたんです☆

今度は、ずっと遠くの（以前次男坊がお世話になった）大学病院の裏手の山へ、エサと一緒に置いてきました。

こんなことしか出来ない自分が情けない……。 （泣）

もしも、また戻ってくるようなことがあるなら、その時はご近所が何と言おうと飼おうと誓った我が家……。

2003年7月の出来事でした。

さよなら、メル

2003年の8月半ばの台風が接近していた週末。

ノミ除けの薬を付けた時にはいつもと変わらぬ様子だったメルが見当たらなくなり、もしや下水道に流された?!と皆で心配していたところ、日曜の晩に弱々しい姿で戻ってきました。

急いで動物のお医者さんに時間外診療をお願いして連れていったところ、一年前に4キロあった体重が2.5キロに減っていることがわかり、何か大きな異常があることがわかりました。

ワタシはnobvkoの夫と相談して、これ以上メルの病名などを知るために診察に連れてくることはしないで、家の周りで最後の時を過ごさせることにしました。

その晩は、いくどかその中で過ごしたことがあるオリの中で、静かに横たわっていたメルでしたが、明け方の4時頃ニャーと鳴いて外に出たがったので、扉を開けたところ、いつものお気に入りの場所へよたよたしながらも歩いて行きました。

そしてその朝は、呼べばまたやってきて、日頃は食べなかった煮干し（だしを取った後のやわらかくなったもの）をムシャムシャと食べましたが、日に日に食は細くなっていきました。

水曜日の夜。nobvkoの夫がいなくなったメルを探していたら、少し離れた草むらから出てきて、少しご飯を食べた後、玄関先の小屋（屋根付きのネコ用トイレの中にクッションの小屋を入れたもの）に自分から入りました。

木曜日。朝から雨が降っていて寒かったため、まだ小屋に入っていたメルをそのまま玄関の中へと移しました。

メルはニャーと小さい声で応えていましたが、外にはもう出てきません。

そしてお昼ごろ、息もやっとという様子になり、長男が声をかけながら見守っている時に、メルは旅立っていきました。

円らな瞳を開いたまま・・・。

ネコは、最後の時には飼い主の目の届かないどこかへ行ってしまおうと聞いていたので、メルは昨日、そのつもりだったところに戻ってきてくれたのかもしれないねと、皆で話しました。

今は、お気に入りだったアベリアの花の木陰で、仲良しだった犬のタップと共に眠っています。

夢のお告げ

メルがいなくなって本当に寂しい。

庭で雑草を取っていても、もう戯れついてくれる猫はいない・・・。

出かけようとするについできちゃうので、抱っこして庭に戻さなくちゃならない猫はもういない・・・。

帰ってくると、ニャーって駆け寄ってきてくれる猫はもういない・・・。

そんな3年間に過ぎた、2006年の4月。

本当～に久しぶりに群馬で医者やってる弟からの留守電が入っていました。

「何の用事だろ？」と急いで電話してみると、今度は向こうが留守。（笑）
で、その夜見たんですワタシ。

「猫が生まれた」って言うてる弟の夢を・・・。

改めて電話がかかってきた次の日の夕刻。

「たいした用事じゃないんだけどね。」

「そうなの？」

「うん、本当にたいしたことじゃないんだけどサ。」

なぜか言いよどむ弟に、単刀直入に聞いてみました。

「猫ちゃんが生まれるの？」

「えっ？　なんでわかったの??」

弟夫婦が飼っているのは、スコティッシュ・フォールドという種類の猫だそうで、現在いる4匹は全部室内飼い。

その中の一匹が、2週間後に6匹の仔猫を出産予定とのこと。

一応、もらい手は探せそうだといいことらしいのですが、いろいろ話をしているうちに、我が家も一匹貰い受けることになりました。

生まれてくる中に短毛のメスがいたら、親猫と3か月間一緒に過ごした後でという条件つきで。

お店で並んでいる仔猫は、通常生まれて1か月～1か月半で親元から離され、可愛いうちに売り場に並べられると以前ネットで読みかじっていたワタシ。

かわいさよりも、仔猫の精神状態が安定する方を優先させることが大切、と脳内インプットされていました。

その分、弟夫婦に手間暇をかけさせてしまうことも発生するのですが・・・。

夢に出てきた仔猫。

もし生まれてくる6匹の中にメスの短毛がいたら、顔は見ないで即決したいと思いました。室内飼いは極力したくないワタシでしたが、この辺りで猫を飼うにはそれしかないことも身に沁みましたし、縁があるならと・・・。

短毛のメスは、ワタシが室内で飼うためのマストでした。

オスだと縄張りを示すためのスプレーを部屋中至る所にかけてちゃったりするそうで、きちんとトイレで用をたすメスと比べると、かなり差があるとのこと。

(去勢すればかなり防げるとも聞きますが、どうなのでしょう?)

そして長毛は、季節の変わり目に毛が抜ける量が半端じゃないそうで、アレルギーありのワタシにはちょっと耐えられそうにないことと、お風呂もトリマーさんじゃないと難しいそうで、自分が美容室に行くのも億劫なワタシには無理。(笑)

本当はどんな仔でも縁があればと思っていたのですが、室内で飼うしかないならこの条件は外せない・・・と。

そういえば、「親猫は耳折れで血統書付き」だと言っていた弟。

耳折れって???

何も知らないワタシは、スコティッシュ・フォールドについてネットで調べてみました。すると、ちょっと難しい問題をかかえた種類の猫のようでした。

1961年にスコットランドのスコティッシュ村の近くの農場で耳折れ猫が見つかったことから、ブリーダーの手で人工繁殖が始まった種類で、かなりの確率で奇形や病気の仔が生まれる(特に耳折れタイプは)と、ブリードの難しさが指摘されていました。

そのため、イギリスのGCCF(愛猫家協会?)では異種交配しない限り繁殖に適さない猫種であるとして、スコティッシュ・フォールドを品種として認定しないことに加え、繁殖も認めないという厳しい決定を下したとのこと。

日本ではどういう経緯でもてはやされるに至ったのかは分かりませんが、お店などで貰ってくる場合には生後6か月経っているものが無難、等とも書かれていました。

ワタシが弟に「生まれて3か月後に譲り受けたい」と話したのは、仔猫が安心して親猫から離れる為。

病気が発病することを見極めようと思ったからではありません。

病気を持っている仔猫を選ばない、というのはかえって可哀想で出来ません。

でも、スコティッシュ・フォールドがかなりの頻度で発症する可能性がある病気は、深刻な場合が多いということが書かれてあり、ケアしてあげるにはそれ相当の経済的な負担が必要になることがわかりました。

もしも譲り受けた仔がそのような病気持ちだった場合に、我が家の家計では正直なところ養って

やれる自信がありません。

弟は電話で「何かあったら引き取れるから」という趣旨のことも言っていましたが、もし今回譲り受けた猫ちゃんがしばらくしてから病気を持っているとわかったとしても、弟の所に戻すことは難しいでしょう。

なによりワタシの性分として気になったのが、スコティッシュの発症する病いがイギリスの愛猫協会が警告を発するほど可哀想なものだということ。

「かわいい」仔猫を得るために、犠牲になる仔が高い確率で出るとわかっていながらブリードするなんて。

今回のスコティッシュの件では、「弟よ、おまえもか」の心境になっていました。

(知らなかったとしたら、なおさら・・・。)

命との向き合い方

仔猫の件は、それから3日めの晩にかかってきた弟からの電話で結末を迎えました。
母猫のお腹の中にいた六匹の猫は、電話があった翌日までには全て死んでしまったそう。

二週間後と聞いていたのですが、実は我が家に電話をかけ終わったその晩に出産が始まり、五時間かかってようやく四匹は生まれでたものの、残りの二匹は死産。
生まれた四匹も母猫のお乳を吸うことができずにやがて死んでしまったとのこと。
母猫の体は大丈夫だったようですが、いずれにせよ可哀想なことでした。

メルやタップ亡きあと動物のいなかった我が家に再び猫がやって来るかもしれない！ と、とても楽しみにしていた次男坊は、あまりの展開に涙を浮かべて布団をかぶって寝てしまいました。
(次の朝には、気を取り直して学校に出かけていきましたが。)
ワタシにとっての悲しみは、仔猫との縁がなかったこともさることながら、弟にワタシの気持ちを素直に理解してもらえなかったことでした。

ワタシは「病気の猫を飼いたくない、健康な猫であることを確かめたうえで飼いたい」とはこれっぽっちも思っていないでした。
ワタシ自身、猫にもよく見られる腎臓の病を親から譲り受けている身。
病気持ちの猫に親近感さえ覚えます。

そもそも、何匹かいる仔猫を並べて「この仔は病気持ちで面倒がかかるからパス」っていうことは、ワタシには出来ません。
かつてタップ(←犬)のもとにメル(←猫)が居着いたとき、もし怪我をしていたり病気を持っていることがわかっていたとしても、我が家は彼を拒まなかったと思います。
実際、去勢も含めて何度か獣医さんのお世話になりました。

それと同じように、縁あって飼う以上、十分なケアができなくなる可能性が高い仔猫を気楽に引き取ることも出来ないのです。
スコティッシュ・フォールドはその血の濃さゆえに深刻な病を宿している可能性がとても高く、もしそうである場合には、例えば頻繁に鎮痛剤を打ってあげなくてはならないほどのケアが必要になると知った上で、それが出来もしないのに引き取るような無責任なことはしたくないのです。

そして何より、人為的に生み出され、自然界ではいずれ淘汰されてしまうような種を生まれ続けることが「ナチュラルなこと」であり、「そんな中からいつか進化が起こるんだよ、お姉さん」といった弟が医者であるということが、ワタシにとっては大きな悲しみでした。
弟に言わせると、「人間が自覚すべき『やるべきでないこと』について考える」というのは「古

くて何も生み出さないこと」なのだそうです。

確かに、麻酔医として日々生き死にの現場に身を置く弟にとってみれば、ワタシの考えはナイーブすぎるのかもしれませんが。

そう思って、弟の気分を害したのではと詫びたワタシに、

「別に気にしなくていいよ。鎮痛剤を適正量打っても痛みが治まらないって訴え続ける患者って結構いるんだけど、それはほとんど僕との相性みたいなもんだから仕方がないんだよ。一応話は聞くけど、そんなに真剣には受け止めてないしさ。」

と答えた弟に、さらに啞然。

テレビや新聞に出てくる「共感性ゼロの医者」になっちゃってる・・・！？

ああ、最初のメルの時みたいに、玄関あけたら仔猫っていう出会いはもう有り得ないのかなあ・・・。

ホラー系作家の手の込んだホラかと思ったら

2006年8月18日付け日経新聞（夕刊）「プロムナード」に掲載された、直木賞作家・坂東眞砂子さんの「私は子猫を殺している」という内容にエッセイに、ネット上は騒然となっているとか。

育てられない子猫は、最初から生まないように手術する。

私は、これに異を唱えるものではない。

ただ、この問題に関しては、生まれてすぐの子猫を殺しても同じことだ。

子種を殺すか、できた子を殺すかの差だ。

確かに未来の可能性を奪うという一点においては、その通りです。

結果的にはそうせずにすんだものの、最近拾った捨て猫のお腹の中で生まれでる時を待つ命を断とうとしたワタシですから、この作家女史のことをとやかく言えないのかもしれませんが。

でも、1か0かで物事を断じてしまうことには、強い違和感を感じます。

「避妊」と「墮胎」、そして「生まれた仔猫を殺す」ことそれぞれの間には、大きな質的な差を感じる感性がワタシのなかにあります。

もちろんそれは、「生まれた仔猫を殺す」ことの罪を1とすればその他の罪は限りなくゼロになる、という感性ではなく、避妊を1とすればその他の罪はより大きくなるという感覚です。

初めて感じる世界の光に体を振るわせ、これから未来に向けて精いっぱい力で歩き出そうとする姿を見て、何も感じず殺せるのだとしたら、そのような感性を持って生きることが女史の背負う業。

ならばそれは、哀れというほかはないでしょう。

「私だってその辛さは感じている。でも、母猫の人生をより充実させてやることを優先して、敢えて『産む』という体験の後で子を殺すのだ。」

という感覚をお持ちなのかもしれません。ネット上で紹介されているご本人の記述のなかでも、

避妊手術のほうが、殺しという厭なことに手を染めずにすむ

と、殺す方がより心理的に負担が大きいことを素直に表現されています。

ならば、その感覚を素直に受け入れたほうが人として自然なのではないでしょうか。

そうしないのは、やはりご本人の記述にあるとおり、「親猫にとっての『生』の経験」を犠牲にすることのほうがより厭なこと、と感じているからでしょう。

もし、母猫への共感の方が生まれたての仔猫への共感に勝るといふのだとすれば、それは猫のことだけに留まらず、子供の未来を育むための時間に責任を持つことより自分の都合を優先させる世の多くの親たちに通ずる生き方かもしれない、そんなふうにも思えます。

もしかしたら作家女史のなかには、

「捨てられる仔猫は、その生涯が『捨てられる』という悲劇で始まった以上、明るい未来よりも悲惨な運命が待っているに決まっている。そんな悲しい生涯なら、少しでも早く終わらせてやるのが、自分のエゴで動物を飼うヒトとしての責任の取り方だ。」

という理屈もあるのかもしれませんが。

だとすればそれは、「仔猫を助けたいけど出来ない」という素直な感覚を封じ込めるため、あるいは全く逆に「仔猫を殺したい」という素直な感覚を隠ぺいするための屁理屈としか受け取ることができません。

はたして、そんな屁理屈をわざわざ新聞に載せるような方なののでしょうか、この女史は……。よくよく考えてみれば、

タヒチ島の私の住んでいるあたりは、人家はまばらだ。

草ぼうぼうの空地や山林が広がり、そこでは野良猫、野良犬、野鼠などの死骸がころころしている。

子猫の死骸が増えたとして、人間の生活環境に被害は及ぼさない。自然に還るだけだ。

との記述から察するに、女史は自ら手を下す必要など全くなさそうです。

親猫の「生」を優先させるというなら、子育てという「生の経験」までさせたうえで、仔猫を野に放てばすむ筈。子離れの時期が来た親猫は容赦ないですからね。

そんなことを考えると、もしかしたら女史は、税金で捨て猫や捨て犬を大量に殺して、それも一握りの誰かにその役目を押し付けて平然としているワタシたち日本人社会に一石を投じるための「ネタ」として、さらには前述のような子供よりも自分の生を優先する親たちに対する辛らつな皮肉として、この一文を発表したのかも……。とも思えてきます。

だとしたら、作家である女史にはこのメッセージを物語として綴って欲しかった。

この作家女史が綴っているのは、一体どのような物語なののでしょうか。

舞い込んだ風

「お向かいの駐車場に仔猫が迷い込んだらしいよ。ご主人の足にスリスリしてた。今、近所の女の子が家に連れていったみたいだけど、飼ってもらえるのかなぁ・・・。」

早めに帰宅したnobvkoの夫が心配そうに教えてくれました。

「どんな猫だった？」

「なんか、灰色っぽかった。お向かいのご主人はアメリカンショートヘアだ、って言ってたよ。」

「アメリカンショートヘアだったら、飼い主も探してるかもね。」

その後、10時頃に外に出て様子をうかがった時にも猫の鳴き声は聞こえなかったので、「きっと女の子の家に入れてもらえたんだろう」と安心して床につきました。

そして次の朝。

新聞をとりに庭に出たnobvkoの夫が、

「アサガオの種、また二つ芽を出したよ♪ それからあの仔猫、お隣の庭にいるよ。」

ワタシも庭に出てみると、確かにいました。

お隣の庭のテラスに灰色の仔猫が。

どうやら女の子の家では飼ってもらえず、ご近所を彷徨い歩いている様子。

こちらの視線に気づいて、ワタシに体をすり寄せて来た仔猫。これぞ待ちこがれていた「短毛のメス」！？ と思いながら、持ち上げてみるとおっぱいが！

仔猫というにはちょっと大きめだけれど、その表情にはまだあどけなさが残っています。

なのにおっぱいが！？

お腹が空いているようなのでとりあえず牛乳をあげ、nobvkoの夫に近所のコンビニまでキャットフードと猫の砂を買いに走らせました。（笑）

その間ワタシは、物置きの奥にしまってあったメルメルのケージを出してきて組み立て。

あらためて仔猫をよく見ると、皮膚病のためかところどころ毛が薄くなって肌がうっすらと見えるところがあります。

それから、お腹にはハッキリと並ぶおっぱい。（笑）

飼い主を探すにせよ、ウチで飼うにせよ、一度獣医さんに診ていただかないと・・・と思っているところに、nobvkoの夫が戻ってきました。

nobvkoの夫の夫が買ってきたキャットフードを不思議そうに眺めてから、空腹に負けてカリカリと食べはじめた姿といい、裏返した箱のふたに猫の砂を敷いた急ごしらえのトイレにきちんと用を足す姿といい、どこことなく育ちの良さを感じさせる仔猫。

我が家（の中）で飼うとしたらこんな猫、っていう前に考えていた条件にもピッタリ。

でも、こんなに大人しく躡けられている猫なら、やっぱり飼い主が探しているのかも。

複雑な思いを抱きながら、以前メルやタップがお世話になった獣医さんを診療開始時間を待って訪ねました。

「ずいぶん大人しい猫ですねえ。名前は？」

「今日の朝、迷い込んできたばかりなので・・・。」

「あ、そうか。・・・毛が薄くなってるのは皮膚病じゃなくて蚤のせいですね。しばらく治療すれば良くなります。」

「あのお、お腹におっぱいが・・・。」

「う～ん、妊娠してるかもしれないね。でも、どう見ても生まれてから6～7ヶ月の仔猫だよなあ。」

「やっぱり、飼い主さんが探してるかもしれないですよ。アメリカンショートヘアみたいですし、どこかのブリーダーさんのところから迷い出ちゃったのかも。」

「これ、アメリカンショートヘアじゃないですよ。混ざってるようだけど、顔が違う。雑種ですね。生まれていきなり妊娠しちゃったんで、手に余った飼い主に捨てられたのかもしれないですよ。」

「もしそうなら、うちで飼ってやりたいんですけど、子どもが生まれたら飼いきれないし・・・。」

「今なら避妊手術でなんとか処置できますよ。可哀想は可哀想ですけど。」

「手術しちゃった後で飼い主が現れて、問題になったりはしないでしょうか。」

「お金を拾って自分のものにするならいざ知らず、猫を拾って飼ったからって文句いわれた話は聞いたことないですよ。ましてや、この猫の様子を見ると、そこまでちゃんと世話されてたようにも思えないし。ありがたがられこそすれ、文句を言われる筋合いはないでしょう。」

もともと、飼うのであればするつもりだった避妊手術。

それが、人間の都合で生き物の命の繋がりを断つという、罪深いおこないであることは自覚しています。

それに加え、生まれ出ようとしている（かもしれない）複数の命を断つ罪まで背負うのは、あまりにもしんどい。

でも、育てるにせよ貰い手を探すにせよ、生まれてくる全ての命に責任を果たしきる自信もありません。

ウェンディと名付けられた仔猫は、我が家の玄関に置かれたケージの中で、週末の手術を待って

いました。

お昼前、手術のためにウェンディを獣医さんに預けました。

次の日の夕方には帰って来れるとわかっているけど、やっぱり別れは切ないもの。

ましてや自分の身の上がわからないまま、不思議な匂いの立ちこめる場所に閉じ込められたウェンディの不安といったら察するに余りあります。

我が家に来てからほとんど鳴き声を上げなかったウェンディが、あんな声が出るんだと思うほど大きな声で、ドアの向こうから呼んでいました。

後ろ髪を引かれる思いで獣医さんを後にし、逃げるように帰宅したワタシ。

獣医さんのところまで連れていく車の中、ウェンディはワタシの膝の上で抱かれていたのですが、窓の外を流れる景色や前後左右に揺れる心地が苦手な様子だったので、明日迎えに行く時にはシートに固定できるキャリーを用意してやろうと、初めていまだきのペット用品専門店へ足を向けてみました。

そしたら、ちょうどイメージどおりの品がセール中！

おまけに、そこでもらった福引券で長男がガラガラを一回まわしたら、三等（500円の商品券）が大当たり♪

これは珍しく流れがきているのか、我が家！？

その後、夕ご飯を買って家に帰り着くと、電話の留守録のランプが・・・。

まさか、ウェンディの身に何か！？

あわてて残されたメッセージを再生すると案の定、獣医さんの鉄人・道場六三郎のような声が！

『今、手術が終わりました、が・・・』

が・・・！？

『おなかに赤ちゃんはいませんでした。』

えっ！？

『出産後、一か月位経っているようです。ということは、この猫も生まれてから1～2年は経っているのかもしれませんが。お腹が大きかったのは、子宮に膿みが溜まっていたのと、大量の宿便があったせいでしょう。宿便もかき出し、浣腸もしておきました。』

慌てて折り返し電話を入れ、改めて説明していただいたことによると・・・

おっぱいの大きさからして、明らかに子供を産んでしばらく経っている。
牛や馬なら歯に年齢を重ねた跡が残るのだけれど、犬や猫には残らない。
だから、歯の汚れ具合いや顎の発達具合から推測することになるが、このウエンディは歯もきれいだし顔も小さいから生後半年くらいだと思ったが、色々なことを考えあわせると、生まれてから一年以上経っている可能性もある。
血液検査の結果、猫エイズや猫白血病にも罹っていない。
肌が黄色っぽかったので肝機能障害を疑ったが、血液検査の結果は問題なかった。
皮膚の色が悪かった理由は、おそらく栄養状態が悪かったせいだろう。
子宮蓄膿症は処置したし、宿便も出来る限りのことはしておいた。
今は、麻酔が切れてフラフラしているが、引き取りは明日の夕方まで問題はない。

・・・とのこと。

よかったあ～☆

赤ちゃん猫を殺めることもなく、子宮の病気を治すことができ、おまけに宿便までケアしてもらえたなんて。

我が家にとってはこれ以上ないハッピー・エンドならぬハッピー・スタート！

それにしても、ウエンディは我が家に来るまでのあいだ、どんな生活をしていたのでしょうか。
きれいな歯、きちんと躡けられたトイレ・・・。

小さい体での出産、栄養不良・・・。

大量の宿便は運動不足のせいだとすれば、ケージの中で過ごす時間が長かったってこと？
じゃあ、どうしてウエンディは我が家にやってきたの？

そしてなにより、ウエンディが産んだ赤ちゃんたちは、いまどこに・・・。

歩くと30分はかかる最寄り駅。

雨の朝はしかたなく、nobvkoの夫を車で送っています。

そんなお家が結構あるのか、30分に一本の発車時刻の前後には結構な交通量になる駅への一本道。

そのど真ん中に、昨日の朝たぬきが倒れていました。

「ああ、可哀想に。ひかれちゃったのかな。」

「そうだね。でも見たところきれいな感じだったから、もしかしてまだ生きてて、前の時の狸みたいに林へ帰れたらいいんだけどね。」

「ああ、あの時の狸ね～！ホントにそうだといいんだけど。」

それは忘れもしないずっと前（笑）、家へと向かう幹線道路を走行中、左前方になにやら小さく光るものを確認したワタシ。

よく見ればずんぐりした小さな動物の目で、頭だけもたげる格好で道路脇に倒れていました。

家からも歩いて行ける場所だったので、子供たちを家に入れると、ほとんど真っ暗やみの現場まで懐中電灯を手に夫婦二人で行ってみることに。

するとそこにはすでに先客がいて、中高年のおじさんと、二人連れの若者ヤンキー（失礼）が狸に話かけていました。

でも狸は動けない様子で、ヤンキーの二人組は車に乗ってどこかへ行ってしまいました。

「骨でも折れてるのかな」と心配したnobvkoの夫は、いつも犬のタップを診てもらっていた獣医さんに、近くの公衆電話から相談。

すると、「う～ん、持って来れるなら見てもいいけど、正直たぬきは臭いから困るんだよね～。それに噛まれると大変なんだ。くれぐれも触らないようにね。」とのお返事。

「そんな～★ それでも獣医なの～？」と怒るワタシ。

それが聞こえたのか、その中高年のおじさん、ひょいと狸の首根っこをつまんで持ち上げたかと思うとこう言いました。

「う～ん、こうして立たせることができるから、たぶん骨は折れてないだろう。」

「・・・。」

「まだひとりでは立てないようだが、こうしておけば帰って行くかな。」

そっと、近くの林のへりにその狸を横たえると、真っ暗な道をどこかへ去って行かれました。
おじさんのさりげないお手並みに圧倒されたワタシたち！
家からもってきた水筒の水を皿に入れて狸の近くに置くと、その日は家に戻りました。

翌朝早くあの場所に行ってみると、おおっ♪ 狸はもういません。
ホッとして、あのおじさんの言う通りだ♪ でもどこの人だったんだろう???と思いつつ、口をつけていなさそうな水のお皿を家に持ち帰りました。

そんな出来事があったなあと思い出しつつ、駅からとって返した道すがら、先ほどたぬきが倒れていた場所に目をやると、い、いないっ！
あれから5分もしないのに、たぬきがいなくなっていたのです！
近所の農家のお年寄りが、こんな交通量の多い時間帯に道路の真ん中へ出て行って、たぬきを脇へ運んだとも考えにくい。
たぬき寝入りから覚めた狸くん、無事林へ戻れたのだといいのですが♪

それでも全体としては、狸が交通事故に逢うケースが増えているようで、黄色地に黒の狸があしらわれた交通標識が目立つようになったわが町です。

ミステリアスな我が家

猫のウェンディが蝉を捕まえて食べていました。
庭ではなく、一階の廊下で。

なんでそんな所に蝉がいたんでせう！？
この間はカブト虫の雌がいたし・・・。

謎は深まるばかり。(笑)

危機一髪

いつものように台所の流しで、朝ご飯の後片付けをしているワタシの手元を、ジッと見ていたウエンディ。

フライパンを洗って、さあ、乾かそう！とガスコンロに火を点けた途端、少し離れて座っていたウエンディのお尻脇に引火！

燃えてしまったんです！

慌てて両手で火を消しましたが、ウエンディからは焦げた毛の嫌～な臭いが……。火傷はなくて安心しました。（笑）

こんなこと初めてです。

猫油（って言うの？）に引火したのでしょうか。

そしたら付けていたテレビからは、お天気お姉さんの一言が。

「空気が乾燥しています。火の取り扱いには十分注意して下さい。」

ウエンディは、早速身だしなみを整えております。

黒の仔猫

今、次男坊が反抗期まっただ中で、本当に毎日胃が痛くなる思いをしています。
中2って、どこのご家庭もこんな感じなんだろうとは思いますが、いちいち歯向かう歯向かう。
But、バットとかは振り回してませんけど。
あと少しの辛抱だとは思いつつ、でもこれ以上耐えられない～と思っていた矢先、ついに勉強のことで衝突！

「そんなこというなら家から出て行きなさい！」

と強くワタシが言ったら、本当に出て行ってしまいました。
夕方の6時くらいから一時間経っても戻ってこない。
心配になり、近所や遠くを探しまわりましたが見つかりません。
雨も降ってきて、本当にどうしようと焦り始めた8時過ぎに、家の裏手で中に入れなくて隠れているのを発見。
心底ホッとしました。

今までどこにいたの、と尋ねたら、「公園で猫と話をしていた」とのこと。
歩いて10分くらいのところにある隣の公園のベンチに座っていたら、真っ黒なちょっと小さめの猫が足下にすり寄ってきて、30分ほどゴロゴロと甘えていたのだとか。
そしてどこかへ行ってしまったんだそう。

「その猫、知ってる！」

3日前ほど、夕方暗くなってから郵便を出しに出掛けたワタシは、家の側の空き地にポツンと座っている、生後6ヶ月くらいの大きさの黒い小猫がこちらを見ているのに気がつきました。
なんとなく気になって立ち止まり、しばらく遠くから見つめあいました。
もしポストに投函して戻った時にもまだそこにいたら、そしてもしもメスだったら、ウエンディの相方として迎えようかなとの思いが、ふと頭をよぎりました。
でも、帰り道にはその仔はもう、そこにはいませんでした。

3度目の正直があるといいなと思っているのですが、それ以来出会えていません。

あの猫ちゃんは、何かを伝えるにワタシたちの所に来てくれたのかも。
ワタシも次男坊をもっと信頼して、なにごとにも彼のペースにまかせようと反省しました。

アーサーの復活

クリスマスの夜、我が家に新しい猫がやってきました。

近所の歴史博物館の売店横でウロついていた白い猫。

鼻先に残る引っ掻き傷が物語るように、元気な野良猫たちを避け、人がいる場所をうろうろしていたその猫は、餌をもらえていたかどうか分からないほどやせ細っていました。

おまけに、博物館が26日から正月休みに入るので、見守る目もなくなってしまおう。

ということで、今回はあまり深く考えずに、ワタシとnobvkoの夫で救出してきました。

で、家についてからしばらくして分かったのは、この仔がオスだったこと。

後ろ足の間に、小さい丸っこいのが付いていました。我が家ではメスしか飼えないって思ってたのですが、仕方ない。

これも何かの縁。

最初の晩はウェンディを脅かさないようにと、玄関に檻を設置してほっかいろで暖をとり、急いで買ってきたアニスター（八角）のノミ避け剤を首元にたらししました。

ところが猫の衰弱が思いのほか激しく、最初は食べていた餌も口にしなくなったので、ワタシ（とnobvkoの夫）の部屋に新聞紙を敷いて、下痢をしたり胃液を吐いたりするたびにタオルを取り替えていたら、その子の嘔吐物からピーナッツの欠片が4つも！

これで気持ち悪くなっていたのかも。

どうやらしばらくの間は、まともな餌をもらえていなかった様子。

でも、ピーナッツを吐いてからは容態も落ち着いて、無事に朝を迎えました。

それからはウェンディと2~3日かけながら徐々にランデブーさせ、食欲も旺盛に。

禿げていた両耳の毛も、すごい勢いで生えそろいはじめ、何匹か居たノミも蚤取り櫛で鋤いて取り除き（白い毛なので、見つけやすい）、元気になりました。

うんちもおしっこも、きちんと猫用トイレでしてくれます。

ものすごい甘えん坊さんで、ひざの上で丸くなるのがとても好き。

ウェンディが寂しがらないように気をつけながら、世話をしています。

飼っている猫は新しい猫がやってくると、どこかへ家出してしまうこともあるそうですから。

♪まっし～ろなこやぎ、なまえ～はユキ

いつかしら初めて、あなたと出会ったのは。

そうね。あの、泉のほとり。

冷た～い水を、一緒に飲んだ日～♪

真っ白な毛を撫でながら、昔良く聞いていた「ハイジ」の挿入歌を口ずさんでいたら、nobvkoの夫が

「なら、名前はユキにしたら？」

「ユキちゃんは女の子でしょ。この仔は男の子だよ」

「だったらユキオ？」

「・・・それは絶対、イヤ！（大笑い）」

で、見た目が小熊に似ていることから、つけた名前がアーサー。

前にも書きましたが、アーサー（Arthur）という名は元々ケルト語の「熊」からきています。

次男坊が毎週楽しみに観ていた『魔術師マーリン』も、昨夜最終回を迎えました。

アーサー王子が死の淵から復活！

シーズン2が今から楽しみです。

猫性腰痛

熊のような猫のアーサーは、どんどん大きくなってきたような気がします。

鼻の頭にはひっかかれた傷があり、その周囲がかさぶた(?)でまっ黒になっていたのですが、おととい亜麻仁油を塗ったら気になるのかペロペロ。

すっきりピンク色になりました。

ウェンディに教わって、お腹が空いた時は台所の入り口にある木製の爪研ぎをカリカリ。

我が家の流儀も身につけ始めてくれているようで、嬉しいです。

まだ仔猫のせいか(といっても手足が長いのでウェンディより大きい感じなのですが)とても好奇心いっぱい、家の中をあちこち休みなく動き回ります。

見ていて飽きません。

今年から受験本格モードに突入のため緊張し始めている長男や、同じく受験があるのにまだまだマイペースな次男坊も、それぞれ猫ちゃんたちに癒されている模様。

ワタシは正月明けくらいからずっと腰痛に悩まされていました。

立ったり座ったりする時もズキッ。

立ちっぱなしだと、気持ちが悪くなってくることも。

正月は珍しく母が実家から来てくれていたので、あれこれと気を使ったのが原因?とっていました。

父親譲りの持病からくるものかもしれない、とも。

父もずっと腰痛に苦しんでいたのです。

でも、アーサーを歴史公園の売店脇から救出する際、一時間程暗闇の中で座っていたことを急に思い出しました。

一応防寒の格好ではあったのですが、ホッカイロは腰ではなく手に持っていただけなので、きっとアノ時の冷えが腰にきたのかも。

だいぶ痛みも軽くなり、遠くまで散歩に行けるようになったのでようやくひと安心。

今度から気をつけようと思います。(笑)

ドラム式では180cmのキッチンマットは洗えない

今週の始め、生まれてから半年くらいたった様子なので、可哀想ですがアーサーの去勢手術をしてきました。

前日から24時間の絶食&丸一日の入院体験で、アーサーはかなり大変だったみたい。

家に戻ってきてからは前より甘えん坊になって、夜はワタシの布団の中でずっと寝ています。

アーサーの場合、病気にかかりにくくなるから去勢しようと思ったわけではありません。

ワタシは、家の中でオス猫を飼うことをずっと敬遠していました。

それはスプレーやおしっこで家の中がかなり汚れてしまうという話をよく聞いていたからです。

弟のところにも家の中で飼っている去勢していないオス猫ちゃんが一匹いるのですが、実際おしっこの被害がかなり凄いとのこと。

ベッドの上や柱などに、マーキングしてしまうのだそうです。

でも縁あって一緒に暮らしはじめたアーサーは、今のところそういう問題は一切なかったもので、問題のないうちから去勢することが躊躇われました。

春に目座める前に去勢しておいた方が、本人も少しは楽かもしれないと、勝手に解釈したワタシです。

万が一外に逃げ出した場合でも、赤ちゃんができないですし。

本当、こうした人間の身勝手に、子孫を作る能力を失ったアーサーは大変だったと思います。

やっと一安心、と思った今朝、アーサーは食欲もなく、変だなと思っていたら急に何度も吐き始め、吐き出すものがなくなって胃液だけになったら、そこに血まで混じるように。

どうしたんだろう！？と心配していたら、何か紐状のものが口から吐き出されました。

「？紙？スパゲッティ？」

「これ、虫じゃないの？」

「ええ～～！！」

その白くて長～い虫らしきものをビニール袋に、アーサーをタオルを敷いたマイバックにそれぞれ入れて、大急ぎで動物病院まで連れて行きました。

去勢手術をしてもらった先生の所で見てもらったら、どうやら野良だった時にカエルとか蛇とかを食べたのが原因らしいとのこと。

家に帰り、さっそくお薬をあげました。

しばらくケージの中でじっとしていたアーサーですが、やがてご飯を催促するようになり、今ではまたあちこち動き回れるように。

ワタシは曇り空だった今日一日、嘔吐物で汚れたキッチンマットやソファカバーを何枚も洗って干すのに明け暮れました。

そして分ったこと！ドラム式洗濯機で長いキッチンマットは洗えない！というか脱水できない！

ドラム式洗濯機で短めのマット類を洗う時は2～3枚一緒に洗うと、うまくいく！（笑）

仔猫見つけた

まだまだ蒸し暑い毎日が続きますが、我が家にまたまたホットな話題が・・・。

そう、仔猫を見つけてしまいました。

近くの歴史公園を散歩していたら、公衆トイレの方からなにやらミイミイ鳴く声が。

あああ、捨て猫だ。どうしよう。

拾って行くわけにはいかないし、でもあの鳴き様はかなりお腹が減ってる仔猫っぽい。

ええい、見回りの守衛さんに叱られるの覚悟で、アーサーとウエンディのエサを分けてあげよう

。

で、その後は少しは元気になるだろうから、そのままと言うことで。

と姿も確認せずに家にとって返したのがウンのつき。（←別にチャレていません）

お皿とエサを抱えてその場所に戻り、本人を確認してビックリ！！

なんとまだ親離れできないほどに小さい猫がそこにうずくまっていたんです。

こんどは声も出ていない。

これはまずい。

こんなものを見てしまって放っておくわけに行かない。

どうしよう・・・。

で、仕方なく三匹目と相成りました★

哺乳瓶と、仔猫用ミルクと、離乳食を遠くのスーパーで買い込んで、動物病院の先生のところでノミよけ（というか既にノミだらけ★だったので）の薬を塗ってもらって、家で量ったら、350グラム弱。

頭の上と、後ろ足の膝からくるぶしまでと、尻尾、それから左手のひじが茶色のきじ？、の全体的には白いオス猫です。

もう歯が生えているので、ミルクは卒業させた方がいいとのことで、離乳食をあげ始めましたが、しばらく手がかかりそうです。

ウ～ン★前から捨て猫が多くて行きにくい公園だったけど、もう絶対近づかないぞ。

名前はまだない

次男坊は仔猫を見るなり、もしかしたら母猫が餌を取りにいつているところだったのかも・・・と心配しました。

もしかしてワタシ、早まったことをしたのかなあ。

でも、あのとき直感的にそれはないと思ったんですよね。

改めて考えても、人の出入りのある場所に親猫が仔猫を一匹だけ置いておくとはちょっと考えられない。

体中から声を振り絞った最後の叫びのようなあの鳴き方は尋常じゃなかったし。

放っておいたら、すぐ近くの木で鳴いてたカラスの餌食になっていたかも。

それも自然の摂理、なんて高木美保さんのようには考えられないワタシ。

乳歯が生えはじめている割には痩せているように見えますし、10日に連れてかえってからの今日の明け方までウンチが出なかったのに、今日は二回も出たところを見ると、お腹のなかは空っぽだったのではないかと思います。

ネットで調べてみたら、オスで歯が生えてくると捨てられちゃうケース、多いみたいですし。

今では、ケージの中で一人遊びをしたり、静かに眠ったりと、だいぶ落ち着いた様子で、アーサーはそれを不思議そうに覗いています。

ウェンディは、なぜか知らん顔。（笑）

キュート♪

おチビさんが家に来てから一週間が経ちました。

最初は350グラムだったのが、今では450グラムと一日に10グラムくらいずつ大きくなっているようです。

見た目にはかなり猫らしくなり、可愛くなってきました。

好奇心一杯に家の中をあちこち歩き回っていますが、先輩オス猫のアーサーがいつも母猫のように付いていてくれるのでとても助かります。

たまに取っ組み合いのようになる時も、アーサーなりにかなり加減してくれている模様。

大先輩猫のウェンディはメスなのに相変わらずノータッチですが、もうシャー★と怒ることはなくなりました。

名前も次男坊の提案でメル3世に決定。

初代と2代目の後を継ぐ三匹目となりました。

離乳食を食べているのですが、便がゆるいのが気になり先ほど獣医さんに診てもらったら、特に寄生虫がいるわけでもなく、離乳食期特有のものの可能性大とのことで、少し安心。

まだまだ甘えん坊ですが、たくさん遊んだ後は自分から寝床に戻っていく様子は、見ていて微笑ましいです。

それにしてもこれからこの子が大きくなってアーサーのように5キロもある大きな雄猫になるのかと思うと不思議な気持ちがします。

いくら可愛いからって、絶対に三匹以上は増やさない！

これ以上は無理！

「クレージーキャットおばさん」にはなりたくないワタシですが、さてどうなることやら。(笑)

今度は便秘、と思ったら出ました♪

今日、近く、といっても車で30分ほどのところにある大型ショッピングセンターでクジを引きました。

週末の客寄せイベントとして、今週から4週間にわたって催されるくじ引き大会。

1人300円でハズレても500円分の商品券がもらえる、ちょっぴりお得なくじ引きには、10時の開店から人の列が。

で、ワタシとnobvkoの夫で引いたら二人とも見事にハズレ☆

ワタシたちの前後で一等とか三等とか、大当たりが連発されていたので、その分余計にガッカリ★

家に帰ってそのことを息子達に伝えると、

「もうウチにはメルが来てくれたから大当たり出ちゃったんだよ、きっと」

とは次男坊の弁。

なるほど、そうなのかもしれないとは思いつつ、また来週の日曜日に出かけてみようと思うワタシでした。（笑）

それにしても、メルはウェンディとアーサーの子供のような柄なのでホント不思議な感じです。

メルと出会うまでは、もうアーサーで最後と思っていたし、そのアーサーを雄と判ったうえで連れてくる時も相当の覚悟が要った我が家。

でも、3匹以上は本当に飼えないので、これ以上の出会いがないように祈っています。

メルは一昨日まで下痢気味だったのに、今度は便秘になってまる2日間お通じがありません。

本人は食欲もあるしいたって元気そうなんですけど、やっぱり心配。

・・・と思っていたら、先ほど出ました♪

大型ショッピングセンターにあるスーパーの、近海魚半額セールで買ってきたアジ4匹で、nobvkoの夫がたたきを造った時に出た背骨部分をお湯で煮て、背骨についていた身をほぐして煮汁と一緒にメルにあげたんですが、それが良かったのかな！？

とりあえずホッとしました。

今年も送付完了！

おととい、ちょっぴり冷たい風が吹くなか拾い集めたどんぐりは8キロ。

2日ほど乾かした後、福島で熊の保護活動をされている方に宛てて先ほど発送してきました。

ここ2～3年、我が家はこちらに送付しています。

今年は美味しそうなどんぐりを探すのが大変でした。

色は薄いし、中味がからから。

それでも、例年大きなどんぐりが生る公園で、どうにか満足いく質を確保できました。

夢中で穫っていたら、そばを自転車で通りかかったおじさんが「それ食べるの？」。

熊に送るんです、と答えたら、そのどんぐりは灰汁が少ないから人間でも食べられるんだよ、と教えて下さいました。

20数年前の草刈りの時、まだ小さかったくぬぎやどんぐりの若木を残しておくとは崖崩れ防止になる、とそのおじさんが役場の人に頼んで、今ではとても大きく成長したのだそう。

まさか、その木の実を熊に送る人が出てくるとは、流石にそのおじさんでも想定外だったかな。

(笑)

兵庫の「くまもり」さんでも、今年は例年にも増して活発に活動されてるご様子です。

熊が人里に出てこないよう、山に餌を置いてきているそう。

これはもちろん餌付けなんかではなく、緊急措置。

「クマの食料になりそうなものは全て片付けよ」という行政指導は間違っている、とHPに書かれています、ワタシもそう思います。

是非とも行政には、「片付け」た柿やリンゴを熊のいる森に置いてくるようにして欲しいです。

ところで8キロのどんぐりって、熊にとっては何回分の食事量なんだろう???

昨日テレビを観ていたら、熊の一回の食事量が紹介されていました。

動物園で飼われている場合は27キロくらい、野生なら15キロくらいが一回量とのこと。

ただしこれはリンゴや柿の場合だったので、どんぐりではどうなのか正確なところはわかりませんが、8キロだと半分量なんだろうなと検討がつかしました★

我が家のネコたち

ネコって本当に可愛いです。3匹いてくれて本当に幸せです。

でも・・・可愛い可愛いとばかり言っていられない出来事がこの秋の我が家を襲いました。

ある朝、いつものように目覚めると、仔猫のマーリンが布団の上に。

「お早う、マーリン♪」とよく見ると、なんとウンチをしている真っ最中だったのです！

うわ〜っ！！と驚いて、現行犯マーリンに嚴重注意。

しかしことはそれだけでは終わりませんでした。

シーツを洗おうと布団から外して見ると、なんとあちらこちらにオシッコの大きな輪ジミが

あ☆☆☆☆

どうやらアーサーが以前からマーキングしていた模様。

それを弟子(?)のマーリンがマネし始めていたようなんです。

なんでこうなるまで気づかなかったんだワタシ！？

それからの我が家は、匂い取りの方法探しで大忙し。

大型コインランドリーは、ネコの後始末で使ってはならない、というネット情報で諦め、最後にたどり着いたのがEM菌に食べてもらう方法でした。

お日様が出ている日は窓辺にその羊毛布団を敷いて、EM菌をシュッシュとスプレーし続けてかれこれ一か月以上、ようやく匂いが気にならなくなってきました★

現在はもう一つあった羽毛布団を使用していますが、ネコは羽毛も大好きなんだそうで、またオシッコされたら困ると、昼間は夏に使っていた硬い竹製のシーツ(?)を上にかけて、基本寝室には立ち入り禁止に。

それでもお天気の良い日はひなたぼっこに丁度いい息子たちの部屋に入ってしまうのを禁止できないので、息子たちの布団にも竹シーツを被せています。

オスを飼うのはやっぱり大変なことがよくわかりました。

でも、仲良く昼寝している姿を見ると、まあいいや♪となんでも許せる気がしてくるからネコって不思議。

クマの駆除に対する抗議がヒートアップしている。SNS「ミクシィ (mixi)」では、人里に現れたクマを射殺したことについて、自治体に抗議の電話やメールを送ろうという呼び掛けが始まった。

コメント欄には「あいつらが嫌になるくらい電話してやります」「山に入る人間も片っ端から殺せばいいじゃん」などという過激なものまで出ている。【中略】

まるで人命よりクマの命が大切だ、と読めるようなコメントに対し、ネットの掲示板やブログには「異常ではないか」という意見が多数出ている。どうして彼らはこれほどまでにクマの命に執着しているのだろうか。

東京にある動物愛護団体に話を聞いてみると、愛護団体や動物を守ろうとする人の思いや立場は様々で一概には言えないが、過激な言動をする人達がいるために、動物愛護の本来の姿が歪んで伝わってしまうことを恐れている、と嘆いた。

「クマに限らず犬、猫に関しても、人間関係が上手く築けない人達が動物に抛り所を求め、どっぷりはまってしまう。その結果、人間が大切か、動物が大切かの後先がわからなくなってしまい、過激な発言や行動に走るということが、たまに見受けられます」

と打ち明ける。

また、動物に関する知識の無い人もいて、人里に来ないように「クマさんのためにドングリを集めよう」と活動したが、集まったドングリはクマが食べない種類のものであった、ということもあった。【後略】

[2010年11月15日19時3分]

昨夜のinfoseekのこのニュース、フ〜ン、mixiでそんなことになってるんですか。

「クマに限らず犬、猫に関しても、人間関係が上手く築けない人達が動物に抛り所を求め、どっぷりはまってしまう。」

確かにそう言う側面もあるかもしれませんが、動物愛護に限らずネットの中では「正義面した暴走カキコミ」は一般的に見られること。

動物に「はまる」ならまだ良い方で、過激なカキコミしてる人のほとんどは、バーチャル空間で日常の憂さを晴らしてるだけでしょう。

ところで、

「集まったドングリはクマが食べない種類のものであった」

って、そういうことがあるなら、「クマが食べない種類」を伝えてくれなきゃ意味がないです。

「熊森」さんのサイトには『ブナ・ミズナラは不可』とある一方で、河北新報さんは

福島を除く東北5県で今季、ブナの実の結実状況が「皆無」となったことが東北森林管理局の調査で分かった。ブナの実はクマが冬眠する前の餌となっており、東北

で多発しているクマの出没にも影響を与えているとみられる。

と報じているなど、ワタシのような「動物に関する知識の無い人」にはどっちなのか判らない部分も。っていうか、この場合は「動物に関する」というより「どんぐりに関する知識」が正解のような!?

いずれにせよ、今回のinfoseekのようなネガティブな視点の分析コメントばかりだと、せっかく何かしようと思ってる人が、無駄になるかもしれないから止めておこう、ってなっちゃいますよね。

No more 「何もしない理性」!

皆さん、公園に落ちているどんぐりは「マテバシイ」という種類が多いそうなので大丈夫です☆
どうか少しでも拾い集めて、山に送って下さらないかなあ。(泣)クマは山に食べ物がなくて、人がいる空間まで降りてきてしまうんですから。

豊作になりますように

この秋にドングリを送った会津のくまんちさんから、ドングリ拾いへのサンキューメッセージとポストカードが届きました。

この度はたくさんのドングリを送ってくださりありがとうございました。

無事、12月6日をもちまして全てのドングリを山へ運んで参りました。

今年はたくさんのクマ達が里へ降りてきてそのほとんどが殺されてしまいました。

子グマも親子グマも無差別です。

体脂肪ゼロパーセントのクマもいたそうです。

山には食べ物がまったくなく、下を向いて歩いてもドングリを見つけることができません。

そんな中、皆様方が送ってくださったドングリは動物達にとって唯一の救いであり、運よくそれを見つけてくれたクマは無事に冬眠することができると思います。

ドングリを食べてくれた形跡のある箇所には5~6回追加給餌を行ないました。

近くには置き土産のフンも確認できました。

エサ不足の年は今後もやってくると思います。その度に出てきたクマを殺し続けていればいつか本当に絶滅させてしまいます。まして命を簡単に奪ってしまうことは心を持った人間であるならば決してしてはならぬことだと思うのです。

無関心、無感動はとても恐ろしいことです。

困っている人や動物がいれば助ける、飢えている人や動物がいれば手を差し伸べる、それが人間の本来あるべき姿のように思います。

人間に心があるように動物にも心はあります。

皆様方の優しさはきっと森の動物達に届いていると思います。

これからの未来、全てのいきものに対して優しい世の中になってくれることを願っています。

本当に本当にありがとうございました。

追伸

くまんちの仲間「ふくまつ」のポストカード同封させて頂きました。

お使い頂けるとありがたいです。

くまんちスタッフ一同

一回分しか送らなかった我が家。

本当に申し訳ありませんでした。

山で飢えている生き物がいる、ということをつい忘れてしまい、旅行にいけない我が身を時々恨んだりしていました。

テレビをつければニュースでは、クマが助けられている、というイメージばかり流れていましたが、実際は数えきれないクマ達が、ただ恐ろしいからと殺されていたんですね。

そしてそうすることは当然のことだと、大勢の人々が考えている。

なんでクマだけが守られなければならないんだ、と理屈を言う。

今はもう、縄文の世ではないのに。

人々は飢えていないし、狩りを常としていないのに。

そんな縄文の世にはあったであろう自然への畏怖の念も抱かずに、自然界のバランスが大きく乱れてしまっていることも感じられずにいる。

森が豊かでドングリ等の食べ物が十分あれば、人間が怖いクマはわざわざ里に降りてきません。

どうかそのことをマスコミの方々もしっかりと認識して欲しいと思います。

飼われているクマの前に、ドングリと一緒に蜂蜜とか柿の実を並べ、ドングリを選ばない様子をわざわざ映すなどという愚かなニュース番組を流し続けることは、もう止めにしてください。

くまんちさんが以前、やむにやまれず保護した子グマのふくまつ君。

彼の無邪気な姿を写したポストカードを見ていたら、小学生の頃好んで読んでいたパディントン・シリーズを思い出しました。

あのお話は、戦争から戻った作者が綴ったもの。

パディントンの故郷を「暗黒の地ペルー」と表現していたのが印象的でしたが、日本こそクマにとっての「暗黒の地」となってしまうように祈ります。

大地震

2011年3月11日

朝の9時、次男坊の卒業式にnobvkoの夫と出かけました。

卒業生代表として答辞を読むという大役を、無事に果たした次男坊の姿を見届けて帰宅したのは正午前。

最後のホームルームを終え、一足遅れて帰宅した次男坊は昼食を食べるのもそこそこに、二階の部屋でiPadをいじり始めました。

午後2時45分、九段下に出かける用事のあったnobvkoの夫を駅まで送るための支度をしていると、国会中継中のテレビに緊急地震速報が。

東北で大きな揺れが！？と思った途端に家が大きくゆっくりと揺れ始めました。

「東北じゃなくて、この近くが震源なんじゃないの？」

と思うほどの揺れがなかなか止まらず、二階から降りてきた次男坊と二人でテーブルの下に潜り込んでいたら、突然テレビの画面が消えました。

その後も、幾度となく繰り返す大きな余震の中で、nobvkoの夫は出かけるはずだった先の相手に連絡を取ろうとしましたが、携帯電話は繋がらない様子。

一方、ワタシは補習のために高校に出かけた長男に、何度も携帯電話をかけたリメールで連絡を取ろうとしましたが繋がらず。

新聞屋さんから貰った手動ラジオのダイナモのレバーをぐるぐる回しながら、地震の情報を聞いていましたが、伝えられるのは東北地方の大きな被害が主で、首都圏の様子が分かりません。

繋がらない電話とメールを何度も発信するうち、携帯電話のバッテリー残量は残り少なくなっていくますが、固定電話は停電のために使用不能。

手動ラジオに携帯電話への充電機能もあったので、ドラマに出て来る大昔の電話のように、ハンドルをグルグルまわして電話をかけることになりました。

午後4時過ぎ、長男と電話が繋がり、無事を確認することが出来ました。しかし、我が家の最寄り駅から30分ほどの我孫子という駅で足止めされているとのこと。

nobvkoの夫が車で救出に行くと言うので、一緒に乗って出かけましたが、少し走ったところでいきなり渋滞に遭遇したため、いったん家に引き返しました。

改めて長男と連絡をとろうとしましたが、再び通信不能に。

午後7時過ぎ、ガスや水道は無事だったので、ろうそくの明かりのなかで軽く夕食をとっていると、長男から着信。

混雑する駅から離れ、近くのイトーヨーカドーというスーパーに入ったら、偶然に小・中時代の同級生の男の子と出会い、一緒にスーパーが特別に開けておいてくれたコーナーにいるとのこと。

nobvkoの夫と車に乗り込み、二人を救出するために、信号や街灯の消えた夜の道路を走り出しました。

途中、渋滞にハマってしまったものの、9時頃には無事に目的地に到着して二人を救出完了。

午後10時過ぎ、真っ暗やみの我が家に戻り、手動ラジオについているライトの光で猫の点呼をとると、アーサーの姿が見えません。

出かける前には、ソファーと壁の間のすき間に身を隠していたのを確認したのですが・・・まさか、さっきワタシたちが家に入った時に玄関から外に出てしまったのかも！？

そういえば、アーサーは昼からちょっと変でした。

他のネコたちはいつもどおりで、地震がおさまればまた遊びだしたりしていましたが、アーサーだけは怖がってずっとソファの後ろに潜り込み続けました。

昼の食事をかなり残していたのも、もしかしたら予感がしていたせいかもしれません。

そんなことを考えながら家の中と外を弱い光で探しまわっていたら・・・いました！

居間の隅に置かれた小さな低い机の下で、じっとうずくまっていました。

3月12日

長男の大学入試後期試験の日ですが、ラジオが伝える交通情報では試験会場までの鉄道は不通とのこと。

大学に電話をかけても誰も出ません。

正午になってようやく停電が復旧したので、大学のホームページを確認すると「17日に延期、再変更の可能性もあり」とありました。

丸一日ぶりに見るテレビ画面に映し出された東北の惨状には言葉もありません。

まだ度々揺れていますが、それとは別にワタシだけ頭がクラクラしている感覚があります。

6~7か月になったので

明日はいよいよマーリンの去勢だぁ・・・がんばれ、マーリン。

無事完了

マーリンの去勢手術は無事終わりました。

いつもお世話になっている動物病院では丸一日の絶食をさせなければいけないので、今回は半日の絶食で済む初めての動物病院でお願いしてみました。

アシスタントの女性が親切丁寧な方だったので、不安いっぱいに鳴いていたマーリンも大丈夫だった模様。

それでも、麻酔がとれてからの初めての食餌は、ほとんど口を付けなかったそうでビックリ。なんでも好き嫌いなく食べるマーリンが！？

家に連れ帰ってからいつもの餌をあげたら、抗生物質のお薬を振りかけてたのにペロリとたいらげたので、マーリンにとって我が家はウチなんだ、となんだかとても嬉しかったです。

マーリンがいない間ずっと探していたアーサーも、マーリンが戻って安心した様子でした。

昨日は茨城県産のレタスを食べました。

今日は隣町まで片道一時間強の散歩件夕食の買い出し。

スーパーの品揃えが、段々ふだん通りに戻ってきています。

いつの間に脱走！？

小雨が降っているので、課外授業&部活のために高校へ出かける次男坊を車で駅まで送ろうと外に出たら、何と！

マーリン（←仔猫）が庭にいるではありませんか！

いつの間に？

何で？？？

もう、すぐにでも出発しないと間に合わない時間なのに、車を発進させたらその音に驚いてどこかに駆けてっちゃいそう。

名前を呼びながら近づこうとすると、あと一步の所で逃げてしまいます。

それでは、と餌を撒いておびき寄せる作戦に出ましたが、庭の草をハグハグと歯むばかりでこれも失敗。

やきもきする次男坊。

間に合わないよ。

次の電車は一時間後になっちゃうし。

焦ったワタシが、一気に捕まえようと立ち上がって驚かせたせいで、状況はさらに悪化。

お隣の庭に入って朝からご迷惑をかける前に、なんとか事態を収束させようと、nobvkoの夫の支援を求めて二手に分かれ、背後に回ったワタシにマーリンが気を取られている隙に、nobvkoの夫がダイレクトキャッチ！！

なんとか生け捕ることが出来ました。（笑）

目が開いてからずっと家の中だったマーリン。

せめて庭には出してあげたいけれど、驚いて逃げちゃったら自力で家に戻れるかが心配。

なので、庭に出す時もシッカリ紐をつけていましたが、いつの間にか脱走してるなんてこともあるんですね。

そういえば居間でくつろいでいたら、窓の外からトントンとサッシのガラスを叩く音がするので覗いたら、いつの間にか脱走していたウェンディだったということもありましたっけ、ずっと昔。

これからはもっと気をつけなければ。

猫も悲しい

2012年6月28日

ウェンディが逝ってしまいました。

その前後のアーサーとマーリンの態度は印象的でした。

亡くなる前日には、ほとんど餌を食べていないウェンディのことを気遣うように、いつもよりずっと静かにしていた2匹。

ワタシがウェンディ優先で、ずっと庭に出ている、何もおねだりしようとしてきません。

いつもだったら、今度は僕の番だよ、というように外へ出るのを催促するのに。

いつもだったら、2匹でふざけ合いの取っ組み合いなんかをして暇をつぶしてるのに。

とっても静かでした。

そしてアーサーは、死んでしまったウェンディを、見ようとはしませんでした。

マーリンは、何が起こったのかわからない、と言った風に、みるみる冷たくなっていくウェンディのことを、側に来てジッと見ていました。

そしてその夜、マーリンはベットで横になるワタシの側に来て、まるで慰めるかのように、前脚で「トントントン」と口元を優しくたたいてくれました。

ウェンディがいなくなってしまった後のマーリンは、前よりも大人になったように、散歩の時に首につけるリードの紐を、自分から口にくわえて持ってくるようになりました。

庭に出してやると、いつもならすぐにカエルを食べたり蝶を追っかけたりするアーサーが、今日はウェンディが眠る場所に置いた薄レンガ色の丸い石の上にしばらく横たわっていました。

ありがとう、ウェンディ

ウェンディみたいな猫は どこにもいない
アメリカンショートヘアのような毛並みだけれど
首から下は長めの黒い毛が混じっている雑種で
小さな声で鳴く 小さな子
藪睨みのように見えることが多いけど
寝っ転がっているときの瞳はまつげの長い女の子

お腹が空くと 右手でトントンと教えるし
外に締め出してしまったときも 窓をトントンと叩いて教えてくれた

ウェンディみたいな猫は どこにもいない
下水の匂いが好きで 家の中ではお風呂場に入りたがる
拾ったときからお腹が弱くて
食べられるものを探すのにしばらくかかった
それでも食欲は旺盛で 若いときはちょっと太めの4キロ越え
それからしばらくして毛並みが衰え 体もスリムなおばあさん猫になったけど
それでも食欲は旺盛で アーサーやマーリンたちの餌も食べたがった
器用に水をすくって飲んだり 餌をかき集めたり
蛇口から流れ落ちる水をゴクゴク飲むのが大好きだった

最後まで一生懸命に庭を歩いていたウェンディ
6年前 我が家に来てくれて本当にありがとう

Welcome to my home,

Wendy.

We miss you.

銀ちゃんの消失

その仔はこの冬の寒い日に、突然私たちの前に現れました。

頭でっかちで灰色の縞模様の、ちょっととぼけた顔してる、尻尾の先が曲がってるオスの子猫。鳴き声がキャキャって感じで変わってて、声もとても小さくて、亡きウェンディのような洋猫系？

とてもお腹が空いている様子なのがほっておけなくて、アーサーやマーリンの好みに合わなかった餌をあげてみると、凄い勢いでパクつきました。

以来、朝晩我が家の濡縁に来るようになり、家猫2匹が騒ぎ出すので気がついて餌をやりに出ると、もの凄い勢いでタックルしてきては嬉しそうに完食。

シルクのような毛並みから勝手に「銀ちゃん」と呼ぶようになりましたが、長男からは3つ隣の家のリビングの窓越しに犬と一緒に居るのを見たことがあるとの情報が。

飼われているのになんでお腹すかしてるんだろう???

なんてことを不思議に思っていた矢先に、例のアーサー遭難事件が発生。

実はこの事件、外に出ようとして玄関のドアを無造作に開けた長男が銀ちゃんとアーサーを鉢合わせさせてしまい、パニックになったアーサーがそのまま家を飛び出してしまったのです。

責任を感じた長男が、銀ちゃんの家の人に話して、アーサーが見つかるまで銀ちゃんを家の中に入れておいてもらうように交渉。

数日後、無事アーサーは帰還したのです。

その時も、なんで銀ちゃんがお腹をすかせているのかは聞かずじまい。

で、すっかり我が家が銀ちゃんのご飯処となってしまいました。

こんなことをしていると、またゾロ猫嫌いなご近所さんに何か忠告されそうでヒヤヒヤ。

お腹がぺちゃんこだった銀ちゃんは、朝晩食べにきても一向に太る気配がありません。

一日中、自由に外をウロウロしているからかな。

そして去勢していないから。

そういう意味では家の中にしか居られない我が家の去勢猫たちが不憫になったり。

nobvkoの夫や長男が、そんな2匹のことを時々庭に出してあげるんですが、いつもは和室の窓越しに至近距離でにらみ合ってる（見つめ合ってる？）銀ちゃんも、そんな時は庭の隅の方に行っておとなしく遠くから2匹の家猫たちを見つめていました。

先週、私が成田まで歩こうと家を出たら玄関先に銀ちゃんがいて、途中までトコトコ付いてきたんです。

まるでメルみただ♪と懐かしかったけれど、このまま付いてきちゃうと迷子になっちゃうよと、メルの時そうしたように抱っこして戻したら、遠くから私のことをずっと見ていた銀ちゃん。

その晩は気になったので夜の散歩をnobvkoの夫に提案すると、案の定銀ちゃんが駆けて来て、一緒に近所を一回りしました。

そんな銀ちゃんが突然居なくなってしまいました。

3軒先のお家が何も告げずに引っ越してしまったんです。

この家は2~3年ごとに新しい住人が入る貸し住居で、銀ちゃんの飼い主さんもいつかはどこかへ引っ越しちゃうんだろなあ、もしかしたらその時銀ちゃんのこと置いていってしまうかもし

れないなあ、その時は冬を越せるようになんとかしないと。

なんてあれこれ要らぬ心配をしていましたが、こんなにアッサリ連れて行ってしまうとは。

それもまさかのゴールデンウィーク明けに。

こんな風に銀ちゃんとお別れになってしまうなんて。

銀ちゃんはきちんと餌をもらえるかなあ。

新しい土地で、迷子にならないければいいのだけれど。

復活の銀ちゃん

GW明けに、こつ然と姿を消したよそ猫の銀ちゃん。

が、先週始めから再び我が家の濡縁に来るようになりました。

それが、不思議なことに以前のように毎日ではなく、燃えるゴミの日オンリーで。（笑）

ここから我が家では様々な推理が発表されました。

nobvkoの夫説、

「引っ越した前の家（我が家の三件隣）の中に取り残されていたんだけど、不動産屋さんが家の中を点検に来た日に外に脱出できたんだよ、きっと」

長男説、

「引っ越した先から遠路はるばる10日かけて戻ってきた後、他の馴染みの家で順番にお相伴になってるからたまにしか来ないんじゃないの？」

次男坊説、

「引っ越す前にこの近くの知り合いに頼んで、銀ちゃんを室内飼いしてもらってるんじゃないかな」

何はともあれ、見た感じとても元気そうだし、餌にもあまりガツつかないところを見ると、どこかできちんと食べている模様。

そして夕方になるとどこかへ帰っていく銀ちゃん。（笑）

そんな謎が、昨日氷解しました！

ポストに入っていた回覧板の回覧チェック欄の上に、さりげなく書かれた文字に私の目は釘付けに。

「3丁目に引っ越したので班長を代わって頂ける方募集」

そう書いた方こそ、銀ちゃんの飼い主さんだったんです。

どうやらその方は、同じ町内の、大きな幹線道路を渡った向こう側のどこかに引っ越されていた模様★★★

銀ちゃんは新しい住処にしばらく戸惑っていたのかも。

そして、ゴミ出しの日に勝手口から抜け出して、少しばかり遠出してみたら馴染みの界隈に辿り着くことに気づいて、外に出られる機会を狙ってやってくるようになったのかも。

もう会えないと思って本当に寂しかったので、あの時も和室の入口でうつむいているアーサーを見かけた私はアーサーの背中を撫でながら言ったんです。

「アーサーも銀ちゃんに会えなくて寂しいんだよね。ほら、いつもだったらあそこに銀ちゃんが居て・・・てっ！」（←花子とアンに染まってる）

いないはずのその濡縁に、和室の大きなガラス窓の向こう側に、あの銀ちゃんがこっちを見つめて座っていたんですから、もお本当に驚きました。

そして嬉しかったなあ♪

銀ちゃんにまた会えるなんて夢のよう！

アーサーとマーリンは、テリトリーの関係でちょびっとご機嫌斜めのようなのですが。（笑）

愛しの銀ちゃん

ご近所猫の銀ちゃんが姿を消して、再び我が家に立ち寄るようになってから早ひと月と半分ちかく。

と言っても、実際のところはほとんど来ていません。

最初は燃やすゴミの日に規則的に来ていたのに、ここひと月くらいは2回ほどしか。

だからたま～に和室の濡縁に居るのを見つけた時には、大喜びで餌をあげる我が家。（笑）

銀ちゃんはどこに住んでいるんだろう？

しばらく来ない日が続き、ふとそう思ったnobvkoの夫と私は2週間前の週末の夕方、例の三丁目を一軒一軒表札確認しながら散歩。

引っ越されたばかりだから、まだ表札出てない可能性もありました。

が、あったんです！銀ちゃんの飼い主さんのお名前が！

そしてnobvkoの夫が「上、上！」とささやいたので二階を見上げると、張り出し窓の向こうに寝ている銀ちゃんの姿が！！

うわぁ♪ 銀ちゃんだぁ♪

そのお家は大きな貯水池のすぐ横にあるので、池にやってくる野鳥や暮れ行く空を見ているうちにきっと寝むってしまったんだねと思った私たち。

しばらくその場で銀ちゃんのことをじっと見あげていました。

すると銀ちゃんは私たちに気づいたのか小さく一声鳴いてから、窓を降りて行ってしまいました。

銀ちゃんが住んでいる所がわかって我が家は本当に感激&ビックリ。

なにしろ歩いて結構かかる場所だったんです。

あの距離を（どの道を通ってかは実際のところわかりませんが）てくてく歩いて我が家まで遊びに来てくれて、また夕方お家まで帰っていったのかと思うと、本当に可愛くて仕方なくなりました。

そんな発見があった2日後、また銀ちゃんが濡縁に♪

でもそれ以降はまた、頻繁に外には出られていない様子の銀ちゃん。

どうしているかなあ、と銀ちゃんのお家の前を通るのが私とnobvkoの夫の定番散歩コースになりました。

ほとんど窓には居ないんですけれどね。（苦笑）

私たちも様子を見に行くから、これからも我が家に遊びに来てね、銀ちゃん♪

金ラン、やすらかに

私はこの2014年の夏、一匹の母猫と出会いました。最初はやけに弱ってる子がいるなあ、と仕方なく餌をあげ始めたんです。道路の真ん中で車が来ても平気でへたり込んでる猫がいる、とずいぶん前から次男坊が気にしていた猫。

よくみると瞳が綺麗なブルーで、シャムの血が混ざってるような毛色の子。気が荒くて近づくとすぐにフーフー威嚇するけど、なんとなく高貴な感じがある子だったので「金ラン」と名付けました。

地域猫にするために避妊手術をしなければ、と徐々に慣れさせて、最後は庭に設置したケージの中で餌付けに成功。

傷が化膿したマーリンが手術してもらったばかりの先生に相談したら、捕獲できたらすぐに連れてくればなんとかするから、との力強いお言葉が返ってきました。

安心した私は、万年手許不如意にもかかわらず避妊費用の3万円（内6千円は抜糸不要分の手術代）を用意。

ようやくケージを怖がらなくなったので、そろそろ病院に連れていこうと思ったらなんと！3匹の仔猫が現れたあ！！

お母さん猫からまだおっぱいをもらってる小さな3匹から、お母さん猫を引き離すわけに行かなくなって、もう少し様子を見ることに。

その子たちの分も朝晩餌をあげ、庭に猫トイレも設置して数日。餌を置く時間になると、少し前から庭でスタンバイしていた母猫が周囲にみゃーみゃー呼びかけて仔猫たちを呼びます。

私の姿を見るとパッと花火の様に四方に散ってしまう仔猫たちも、やがて落ちついて庭で食べたり遊んだりするようになり、最初の頃は性別も区別がつかないくらい小さかったのが、どうやらオスが2匹、メスが1匹ということがわかるくらいまで急激に成長。

その一方で、このところの猛暑のせいかこの週末に母猫が突然、餌を食べなくなりました。

近くに水を持って行っても、じっと物陰でうずくまって荒い息をしています。

仔猫がいつものように母猫にすり寄ろうとしても、もう怖い顔をして受け付けません。

それでも、子猫たちが庭を元気に駆け回っている様子がうかがえるところになんとか留まっていようとする意志が伝わって来て、その健気な様子に心打たれました。

日曜から月曜に変わった深夜2時45分に、珍しく仔猫が鳴く声で目が覚めた私。

その声は庭から我が家の脇の通路を通過して、ゆっくりと遠ざかって行きました。

朝目覚めたnobukoの夫は、あれは母猫がお別れを言っていた声かも、と言いましたが、私は死に場所へと向かう母猫に着いて行こうとする仔猫の鳴き声だったのではないかと思っています。

合記 仔猫たちに餌をあげる時刻に いつも目撃してた金ランの姿は庭のドアにもあいません

／初、日独交渉に開きのある時刻に、マシロ元元と並ぶマシロの妻は庭のこけしに目をやると、

した。

焼き付ける太陽を遮る葉陰で
今日も母猫は
生まれたばかりの仔を抱く

ミニヨン
ミニヨン
可愛いわが子
大きくなっておくれ
人間には気をつけて

やせ細った母の腹で
三つ仔は今日も安心しきって
出ない乳を押している

ミニヨンミニヨン
可愛いわが子よ
お前たちのためなら
この身はどうなってもいい

母猫は人間に近づいた

差し出された皿から
餌をむさぼり食べた
仔たちのおっぱいのため
恐る恐る人間の庭へと通（かよ）った
やがて母猫の後ろを付いて来た仔たちも
見よう見真似で皿から食べた

ミニヨン
たんとお食べ
ミニヨン
いいかい
朝晩ちゃんとここに来るんだよ

ミニヨン
人間は怖いけど
ミニヨン
母さんがそばにいれば
こんなに勇ましくできるよ
追っかけっこや取っ組み合いだってできるよ

飛び回り始めた仔たちと引き換えに
母猫は突然何も食べなくなった
わが仔を見守って
力つきた母は
息も絶え絶えに葉の陰へ
太陽とわが仔から永遠に姿を隠した

深夜の窓越しに
母を呼ぶ仔の鳴き声が
悲しく 遠ざかって行く

ミニヨン
ミニヨン
あなたのことを忘れないよ
ミニヨン

託された3匹の仔猫～その1

昨年の夏、我が家の周辺にふらりと姿を現したやせたメス猫。

道路なのにペタンと座り込んでることもあってなんだかほっておけない。

仕方なく人目の付かない夜中にそっと餌やりを始めて、増えちゃまずいからと避妊も考え始めた矢先に、ウチ猫のマーリンが左脇の腹に膿を持ってしまい手術することに。

マーリンを前にも連れて行ったことのある獣医さんに外猫（というか野良）の避妊手術が可能かどうかを尋ねてみたら、「大丈夫」とのお言葉にホッとして、しばらくしてからでも連れていけるようにするために警戒心のとても強いその猫をケージに慣れさせようとしていたら、なんとその猫ちゃんが3匹の仔猫（生まれて1ヶ月くらい？）を連れて庭に現れるように。

まさかお母さん猫だったとは・・・と愕然★

1匹なら兎も角、合計4匹なんてどうしようと思っているうちにお母さん猫が食事が出来なくなって、身を引くように死んでしまいました。

自分のことよりも仔猫のことを守り続けた健気な母猫から、この3匹の仔猫たちを託されたのだと受け止めた我が家ですが、ウチ猫たちとすぐに合流させることは出来ませんでした。

なにしろ母猫よりも輪をかけて警戒心の強い、ちょっとした物音にもすぐにパッと散ってしまう仔猫たち。

とりあえず庭先で日に三度の餌やりを始めたところ、当然ですが猫嫌いのご近所の目が厳しくなるなる。💧

それまでは普通にあった挨拶もなくなって、家の境界には猫の忌避剤が蒔かれて、肩身の狭い思い。

超活発な3匹は庭の木に登ったり、左隣の空き地を飛び回ったり。

よく見ると2匹は青い目で、気になって調べてみたら、どうやらシャム猫の血を引くらしい。

道理で運動量が半端ない訳だ。

寒さにはとくに弱いらしいので、本格的な冬に備えて防寒シートで周囲を覆った即席の猫小屋を用意して、湯たんぽを入れてやることでなんとかしのぐことにしました。

託された3匹の仔猫～その2 ウォルターのこと

年末には生後6ヶ月くらいになったので、いよいよ避妊&去勢手術を決行。
手術をお願いしたいいつもの動物病院は、どんなに怯えた動物も安心させてしまうという若い女性の助手さんがいるので安心して利用しています。
今回は野良をまとめて3匹ということもあり、あらかじめ何度も電話で打ち合わせを重ね、連れて行く直前にも電話で確認をしてから出かけました。
しかし、私たちを出迎えたのは、男性獣医さんただ一人。
どうやら、出がけの電話で伝えた到着時刻よりも早く着いてしまったために、助手さんは休憩に入ってしまった様子。
3匹が入ったケージを診察室に運び込むと、獣医さんが

「メスが2匹とオスが1匹ですね。それではオスから出してください。」

と仰るので、nobvkoの夫は指示通りケージの中で怯えるオスの「キッキ」に手を伸ばしました。すると、キッキの隣で外の様子を伺っていたメスの「ウォルター」が、スルリと抜け出してしまったのです。
それを見た獣医さんの一言が、

「大変なことになった☆」

逃げ込んだウォルターを捕まえようと、獣医さんが入っていった診察室の隣の資材置き場のような部屋から響く、ガラスが割れるような破壊音★
しばらくして、ひとり出てきた獣医さんから

「後はこちらでやりますから」

と言われて、キッキとチャッチャを預けて帰宅しました。
そのあとの様子が気になって電話をかけてみたところ、あの助手のおねえさんが出てくださり、無事に捕まえて下さったとのこと。
あのねえさんが辞めちゃったら、あの動物病院は立ち行かなくなるんじゃないかなあ・・・獣医さんの腕は確かなんですけど。（笑）

3匹は無事に戻ってきました。
退院するときは、あの助手さんもいましたし。（笑）
チャッチャとウォルターのメス二匹は、お腹を包帯でグルグル巻かれていたのですが、病院で騒動を起こしたウォルターは、家に戻って庭に離れたとたんに夕闇のなかを包帯を棚引かせて何処かへ駆けていき、しばらくして戻ってきたときはさっぱりした姿になっていました。
あの包帯、別の事件を巻き起こしていなければ良いのですが・・・。（笑）

しばらくしてから、チャッチャの抜糸をしました。
メスの避妊はお腹を開くので、術後しばらくしたら縫合糸を抜かなければならないのです。
チャッチャは素直にペット用キャリーに入ってくれたものの、ウォルターはどんなに誘ってもムリ。
仕方がないのでチャッチャだけを連れて、獣医さんへと出かけました。

動物病院の入口の扉を開けて待ち合い室に入ると、あの助手さんが、今まさに猟犬のような顔をした大きな犬を散歩に連れ出そうとしたところと鉢合わせ。
こちらに気がついた助手さんは、出かける気満々の猟犬(?)を病院の中に引き戻すと、さっそく受付をして下さいました。
診察室に入り、「ウォルターは連れてこれなかった」と告げると、安堵の表情を浮かべ(たように見え)た獣医さん。
助手さんに優しく捉まえられたチャッチャは、尻尾でお腹の縫い目を隠す程度の抵抗で、あっという間に抜糸を完了しました。

それにしても、あと一歩おそかったら、また大変なことになっていたかも……。良かったあ♪（笑）

ウォルターの名前は、白黒斑の背中に「W」の模様があることから、アン・シャーリーの次男のイメージを重ねて付けました。
まだ乳離れしたての頃から勢い良く動き回っていたウォルター。
オスカメスカを確かめようとして、そっと背後に回っても尻尾が邪魔したり、木の枝に登ったところを下から覗いてみても、そこだけ葉っぱや枝で隠れたり、「わざとやってる？」と思うほど判別不能な状態が続いたため、その挙動からオスに違いないと名付けた我が家。

そろそろ去勢を考えなければ……。と思い始めた頃に、ようやくメスと分かった時には既に定着していた「ウォルター」。
大変なことになることを承知で抜糸に連れて行く覚悟が出来ないまま四日後の朝、ひっくり返って戯れるウォルターのお腹を見てビックリ☆
自分で抜糸したようです。（笑）

託された3匹の仔猫～その3 チャッチャのこと

大晦日を明日に控えた朝、庭の隅に怯えるように一人座るチャッチャを見つけたnobvkoの夫。近づいて声をかけても、生気のない目を細めたままのチャッチャのお腹をよくよく見ると、長径10センチくらいの楕円状に皮膚がぱっくりと裂けていました。まさか、避妊手術の縫合後が開いちゃった？ そう思ったnobvkoの夫は、年末ダメ元でお世話になった獣医さんに電話をしてみました、やっぱりお休み。

以前、いまは亡きウェンディーの避妊をお願いした、別の獣医さんにも電話をしたところ、午前中までは診て下さるとのことなので、二人でチャッチャをケージに入れて車で運びました。この獣医さんの見立てでは、この傷は避妊手術とは関係なく、どこかで鋭い物にお腹を擦ってしまった可能性大とのこと。筋肉は傷ついていないから、食欲があるようならば、イソジン朝晩塗って抗生物質の錠剤も朝晩与えれば、一週間くらいで新しい皮膚が出来てくるとの診断を受け、いただいた薬を持ち帰りました。

ウォルターとは違い、おとなしくイソジンを塗らせてくれるチャッチャですが、抗生剤は砕いて餌に混ぜても食べてくれません。というより、今朝まで丸一日何も食べてくれません。傷口は塞がり始めているようにも見えますが、昨日までは感じなかった臭いも・・・。

さすがに大晦日に開いている獣医さんなんていないよねえ、そう思いながらもネットで調べてみたら、なんと有るではあぁ～りませんか！それも、車で10分くらいのところに、年中無休の動物病院が！！さすがに年末年始は午前中のみの診療とあるので、いそいで出発。あらためて診ていただいた結果、縫わなくても傷が塞がるかもしれないけれど、これだけ大きい傷だと時間がかかり、それまでのあいだ家庭で消毒を徹底するのは難しいし、抗生剤ものまないとすれば、いったん縫ってしまった方が治りが早いということになりました。

というわけで、はじめての年越しを病院で過ごすことになったチャッチャ。怪我の原因は定かではありませんが、木から落ちて枝が刺さってしまったというのが濃厚です。避妊手術を終えたばかりで、更なるン万円の支出は相当痛い万年手許不如意な我が家ですが、3匹の仔猫を遺して逝った母猫に託されたからには何とかせねば。次男坊の受験校を減らして賄うことにしました。(苦笑)

獣医さんから退院した直後は、猫が変わったように大きな鳴き声を上げ、表情も恐怖に強張っていたように見えたチャッチャ。大小あわせて3カ所も縫い合わされているお腹が引きつっているせいか、歩き方は少しぎこちないものの、前のようなおっとりした風情が徐々に戻ってきました。1月は毎週一回の診察に通い、ようやく傷が塞がりました。庭で待つキッキとウォルターに会いたそうですが、今回の怪我を契機にチャッチャはウチ猫に。後の二匹は頃合いを見計らって焦らずにそうしていこうと思っていました。そうして直冬の間 外のキッキとウォルターは晴れた日には飛び回り 寒い夜には寄り添うよう

この日は曇り空、気温は15度。猫小屋の湯たんぽの上で眠っていました。

託された3匹の仔猫～その4 キッキのこと

そうしてようやく訪れた春。
朝の明るい陽射しのなかでエサやりをしていたnobvkoの夫が、気になることを言いました。

「キッキのお尻の穴の上に鮮血がついてる」

出勤前にインターネットで猫のお尻の傷について検索したnobvkoの夫によれば、どうやら何かの理由で尻尾のすぐ下が膿んでしまって、それが破れたらしいとのこと。

チャッチャの怪我のときにもらった消毒薬が少し残っていたので、とりあえずはそれで拭いてやって、様子を見ることに。

当のキッキは、暖かい陽射しの中で、飛び始めた虫たちをウォルターと一緒に嬉しそうに追いかけていたので、あまり心配もしていませんでした。

しかし次の日、ちらほら生え始めた庭の雑草を抜いていた私のそばに寄って来た、キッキの後ろ姿にビックリ。

尻尾の付け根が血だらけで、よく見てみると円く陥没している感じに。

夕方帰宅したnobvkoの夫に伝えると、やっぱり獣医さんに診てもらった方がよさそうだという意見。

翌朝、いつもなら玄関の外でエサを待ち構えているのに、いくら誘っても猫小屋の中から出て来ないキッキの様子に、

「今日は早く帰るから獣医さんのところに連れていこう」

というnobvkoの夫の言葉に従い、その日の夕方に、去勢手術でお世話になった動物病院に向かいました。

nobvkoの夫に懐いているキッキは素直に抱上げられ、キャリーケースに入りました。

それでも車に乗せられると怯えて鳴き続け、恐ろしさのあまりおもらしまでしてしまいましたが、診察終了前に滑り込まなければと、オシッコシートで吸わせてそのまま病院へ。

先生によれば、傷はおそらく喧嘩に依るものではないかとのこと。

そう言えば、春になってから我が家の庭先には、メスのウォルター目当ての大柄なオス猫が何匹か出入りしていました。

からだの大きさも、気の強さでも勝ち目のなさそうなキッキですが、ウォルターを守って闘ったのかもしれない。

肛門のすぐそばの傷のため、排便に支障がでることはもちろん、地面に擦り付けて一層悪化させてしまうことは明らかということで、手術して縫い合わせることになりました。

そのまま入院することになったキッキの体重を測ったら4.2キロ。

まだ10ヶ月くらいだけど、大きくなったなあ。

心配そうなキッキに、

「2日後に迎えに来るからね」

と声を掛け、私とnobvkoの夫は動物病院を後にしました。

ところが次の日、手術が行なわれているであろう時刻に、獣医さんから電話が入ったのです。

私はちょうど2ヶ月に一度の病院に行く日だったので、帰宅してから留守電に気づきました。

具体的な用件は吹き込まれていないメッセージ。

なんとなく折り返しの連絡を入れるのがためらわれた私は、仕事中のnobvkoの夫にメールで留守電があった旨を伝えました。

「きっと手術が無事終わったことの知らせなんだろうけど、念のため電話してみようか」

とメールを返して来たnobvkoの夫から、すぐにまた電話が。

「キッキが術中に死んでしまったんだって。」

泣きそうな声で連絡してきたnobvkoの夫。

あまりに突然で、キッキが怖い思いをして可哀想だった、戻って来れなくなるなら病院に連れていかなければ良かった、と後悔するnobvkoの夫。

連れていかなければ、傷が悪化して結局死んでしまったかもしれない、そう慰める私・・・。

翌朝、nobvkoの夫はいつもと同じように早起きをして、庭の母猫のお墓のすぐ隣に穴を掘りま

した。
そして、キッキの亡骸を引き取るために、二人で動物病院へと向かいました。
獣医さんからは、手術を始めたら突然鼻から血を流し始めてあっという間に心臓が止まってしまったこと、AEDもやってみたけれどダメだったこと、死んだ後で血液検査をして血糖値が600以上という値を示したこと、猫エイズに感染していたこともわかったが直接の原因ではないこと、などの説明がありました。
結局のところ、死因は不明。
手術費用として4万円を用意していましたが、血液検査代を加えた5万円の半額だけ負担して欲しいと仰る獣医さん。
ただただ仕方がなかったとしか言えない私は支払いを済ませると、獣医さんがキッキの亡骸を入れてくれたamazonの箱を抱えて車に乗り込みました。

タオルを敷いた箱の中で、円くなって眠っているような姿のキッキを連れて家に戻ると、駐車場のところまでウォルターが近づいて来ました。
箱を開ける前から、中にキッキが居ることがわかっているようなウォルター。
土曜日で家に居た長男と次男も呼んで、皆で最後のお別れをして、nobvkoの夫が掘っておいた穴にムスカリの花と一緒に横たえる様子を、ウォルターもじっと見ていました。
春になってから、近所の大きなオス猫たちからウォルターを守っていたキッキ。
避妊しているとはいえ、これからは庭に1匹にさせておくことはできないウォルターを抱き上げた私は、家の中へ連れて入りました。
こうして、我が家の庭の外猫はいなくなりました。

そして新しい毎日が始まる

そういえば今年4月のあの日、クレアチニンの数値が安定していたことに気を良くした私は、お天気も良かったことから、病院から家までのまっすぐな道を2時間ほどかけて歩いて帰ったのです。道中、道路工事の交通整理のおじいさんに呼び止められました。

「この用水路をね、3匹の鯉が昇っていったのを見たんだよ。」

田圃の脇の細い用水路。

どうやら3匹の鯉が印旛沼から泳いで来たらしい。

「それでどこまで泳いでいったんですか？」

「あそこあたり。行き止まりなんだけどねえ。」

おじいさんの指差した先まで歩いていってみると、そこには少しの段差があって、水はその先へは流れていかなくなっていました。

でも、3匹の鯉の影は無し。

どこへ行ったんだろう？

3匹の野良仔猫の一匹だったキッキの死を知らされたのは、そんな不思議な話を聴かされたすぐ後のことでした。

姉妹思いのオス猫キッキが、自分が死んだ後のチャッチャとウォルターを私に託すために、おじいさんに語らせたんだろうと思っています。